

解剖を実践に生かす 図解 泌尿器科手術

影山幸雄 著

＜書評者＞ 富田善彦（山形大学教授・腎泌尿器外科学）

これまで、特に和文で書かれた手術書については個人的に苦い経験がある。あまりに自信たっぷりだと思入れが強すぎ、アートのみが先行して論理的な思考が欠落した、科学的でないものや、現場で場数を踏んでいない医師の執筆による、お話にならないものが多く、大枚をはたいて入手しても使い物にならないという経験をした。英語で書かれたものにも良書はあるが、なにせ白人や黒人を主な手術対象として書かれているわけで、われわれ東アジア人の解剖にはマッチしない面も少なくない。た

めに筆者は、とかく学会のビデオ演題、DVD、ネット配信画像、AVソースを利用したり、手術後は囲碁将棋のごとく、検討会において手術後の「感想戦」を行ったり、あるいは場所を変えて（居酒屋などで）の「雑談学」により手術のスキルアップを図るほうが合理的と考えてきた。

本書は従来の手術書とは異なるもので、著者の影山幸雄氏のこれまでの経験に基づいた論理的な思考と実践的な眼により著されている。69頁と71頁を見てほしい。尿道後面の2つの膜をこのよう

に理解して手術できる術者は果たして何人に1人いるだろうか。年間何例と多数の症例を誇ってみても、楽曲のネット販売のダウンロード数ではあるまいし、手術の質はその「数」では担保できず、1例手術するごとに解剖学、および手術学の良書をその都度参照し、反省し、次例に生かすような「症例から学ぶ」真摯な態度がなければ、何例やっても質の低い手術しかできるようにならない、と個人的には思っている。本書はそのような真摯な態度に基づく良書の1冊と考え、自信をもって推薦する。

●A4 頁 312 2010 年
定価 12,600 円
(本体 12,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01021-4]
医学書院 刊